

るんびに

第九十号

楊林山 正光寺

波多正文

尼崎市東大物町1-3-7
(06) 6481-3253

十二月十日常例法座 講師

滋賀県 栖雲 深泥先生



今回、皆さんにちよつと考えてほしいのは、正信偈の中に『源信広海一代教』と、そういう言葉がでています。源信、この方は生涯を比叡山で過ごされたお方です。その源信さんが『往生要集(おうじょうしようしゅう)』という本を書いておられます。そこに源信さんが地獄を八つ語っておるのですが、その八つある地獄の一番最後の無間地獄をとても大事に、源信さんは語っておられます。

る、無視されるといふことがあります。そのことを源信さんは、こういう言葉で無間地獄を表しております。

一つが『我、今、帰るところなし』そして二つ目が『孤独にして無同伴』これが源信さんが往生要集に書いておられる無間地獄。地獄の中一番恐ろしい世界として、こういう言葉で源信さんは、無間地獄を表現しておられます。『我、今、帰るところなし』これは居場所の問題です。居場所。人間にとつて、一番辛いのは、自分の存在が否定される。自分の存在が無視されないか。私は何のためにここに居るのか。何のために結婚したのか。何のために苦勞してきたのかがわからんといい。もつと言え、本当に安心しておられる場所がないという。それを『我、今、帰るところなし』居場所の問題として源信さんは取り上げております。

そして次が『孤独にして無同伴』。孤独というの一人ぼっち。しかもいいですか。広い野原にたった一人で居て、独りぼっちならまだわかるけども、同じ屋根の下に家族として住み、息子も嫁も孫も居りながら孤独という。まさに夫婦でありながら、親子でありながら、家族でありながら、声を掛け合うことすらない。そういう人の中に居りながら孤独という。そして無同伴は、誰も私に伴うものなしという。それは、

わかりやすく言えば、誰も私の気持ちをおわかってくれんという孤独感ですね。まさにそれが無間地獄だと、源信さんは教えています。

だからこそ私たちに、南無阿弥陀仏が与えられておるのです。

まさに私たちは、人間としての本来の情、感覚を失って、何か人を騙しても、人を踏みつけてでも『得せにや損だ。儲けにや損だ』というふうになつて今この社会にあつて、だからこそお念仏が『それでいいのか。それで人間と言えるのか』ということを問い返してくる。その働きがあるんだ。そのことをちよつと今回のテーマとしてお話をさしてもらいました。

◆ 報恩講 十一月七日(土) 午後二時～四時

十一月八日(日) 午後六時～八時
午後二時～四時

ご講師 谷川弘顕 師

◆ 成道会 (お釈迦様がさとられた日)

十二月十日(木) 午後二時～四時

ご講師 栖雲深泥 師

◆ 正信偈を学ぶ会

毎月第三土曜日 午後二時～三時三十分